

追放と懐疑の海——『ロード・ジム』——

恒 川 正 巳

ジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の作品の中に見られる重要なモチーフに主人公の追放がある。彼の小説の中で描かれるのは、本来属すべき社会や家族から離れさすらう登場人物の孤独、そして破滅である。社会的よりどこを喪失する際に彼らは何らかの罪を犯す。それは必ずしも法的な罪とは限らず、彼らの自我の中に亀裂を残す経験である。例えば、『オールマイアの愚行』 (*Almayer's Folly*)、『島々の追放者』 (*An Outcast of the Islands*)、『闇の奥』 (*Heart of Darkness*)、「フォーク」 (“Falk”) などがそうである。ただ同じように異質な社会の中で滅びてゆくにしても、自分が決定的瞬間を通り抜けて来てしまったことに気付く者とそうでない者がいる。後者のタイプは自己の変容と墮落に気付かないまま、いやおうなく自然の非人間性の前に屈してゆく。⁽¹⁾

「進歩の最前線」 (“An Outpost of Progress”) がこの状況を描いた典型であるし、またカーツ (Kurtz) の底知れぬ人格の中にも当てはめることができる。これに対しジム (Jim)、マーロウ (Marlow) 等の前者のタイプは、現在の自分が過去の自分から疎外されていることを痛切に意識している。その決定的体験の強烈さ、過去と現在を隔てるギャップの大きさと共に、彼らの人生を悲劇的にするのは、彼らにとって過去は幸福な純粋さ、心の平安を表していることである。その意味で彼らのさすらいを決定づける出来事はやはり墮落であり、罪悪感がつきまとうのである。

この追放のモチーフの一つの原型は『海の鏡』 (*The Mirror of the Sea*) のチェルボーニ船長 (Cervoni) のエピソードである。⁽²⁾ 甥の裏切りのためトレモリーノ号 (the *Tremolino*) を失った彼は、自らの手で甥を殺すことになる。チ

エルポーニは裏切り者を出した自分の血筋に罪を感じながら海を永久に去り、山地を放浪する。また一連の追放のモチーフの中にはコンラッド自身のポーランド脱出も含まれるだろう。コンラッドは祖国救済の闘士になって欲しいという周囲の期待を裏切り、いわば自分自身をポーランドから海へ追放した。結果として彼の中には深い罪悪感が残ったろうと考えられる。⁽³⁾

『ロード・ジム』(Lord Jim) はこうしたコンラッドの作品における放浪のモチーフについて多くを語ってくれる。⁽⁴⁾ 彼の悲劇性は一方では彼が海から追放されたことに発する。ジムは英雄になることを夢見た。そしてその夢は海上で果たされなければならないはずであった。なぜなら、コンラッドにおいて海はヒロイズムをはぐくむ特別な虚構の場であったからである。海を追われても自分を理想化する欲望を捨て切れなかったところに彼の破滅の一因がある。しかし他方ではコンラッドの海は、ヒロイズムどころかすべての虚構、言説と論理性を崩壊させるような懐疑をはらんでいたのである。ジムの悲劇は意味の非決定性からも発している。彼の放浪とそこに現れる再生への願望はこうしたコンラッドの海的二面性の構造の中にあることを明らかにしたい。

ジムは船員の社会から追放された。これは言わば二重の追放であった。船乗りの世界は陸の世界とは隔離されている。コンラッドにおける海は、素朴なヒロイズムの実現の場として優遇されている。例として『偶然』(Chance) と『影の線』(The Shadow-Line) を見てみよう。『偶然』においてアンソニー船長 (Captain Anthony) は長年同じ船に乗ってきた航海士のフランクリン (Franklin) に次のように語っている。

It ought to teach you not to make rash surmises. You should leave that to the shore people. They are great hands at spying out something wrong. I dare say they know what they have made of the world. A dam' poor job they make of it, and that's plain. The world is a confoundedly ugly place, Mr. Franklin. You don't know anything of it? Well-no, we sailors don't. Only now and then one of us runs against something cruel or underhand, enough to make your hair stand on end....

"Franklin was impressed by this unexpected lecture upon the wickedness of the solid world surrounded by the salt, uncorruptible waters on which he and his captain had dwelt all their lives in happy innocence."⁽⁵⁾

極めて単純な形で海上生活の純粹さ、高貴さと、陸の社会の邪悪さが分離されている。彼のこの単純すぎると思われる価値観は引用後半部分では語り手によって若干皮肉られている。しかし『偶然』はハッピー・エンドの小説であり、アンソニー船長の存在は小説によって肯定され、彼の単純さは美徳として位置付けられている。

『影の線』では船乗りの共同体は王朝的伝統を持つものとして描かれている。船長として初めての航海に出ようとする語り手は次のような思いに耽る。

I sat down in the arm-chair at the head of the table-the captain's chair. . .

A succession of men had sat in that chair. I became aware of that thought suddenly, vividly, as though each had left a little of himself between the four walls of these ornate bulkheads ; as if a sort of composite soul, the soul of command, had whispered suddenly to mine of long days at sea and of anxious moments. . . .

Deep within the tarnished ormolu frame, . . . I saw my own face propped between my hands. And I stared back at myself with the perfect detachment of distance, rather with curiosity than with any other feeling, except of some sympathy for this latest representative of what for all intents and purposes was a dynasty ; continuous not in blood, indeed, but in its experience, in its training, in its conception of duty, and in the blessed simplicity of its traditional point of view on life.⁽⁶⁾

自らの義務に対する確固たる責任感、訓練によって培われた技術と肉体、そして姑息な手段を嫌う高貴な素朴さによって結び付けられるのが船乗りの社会なのである。このようにコンラッドの海は船乗りのヒロイズムの理想が織り込ま

れていた。したがって、マーロウによって真の船乗りになるべきはずだった若者として位置付けられるジムが、海の英雄になることを夢見ても何の不思議もない。

On the lower deck in the babel of two hundred voices he would forget himself, and beforehand live in his mind the sea-life of light literature. He saw himself saving people from sinking ships, cutting away masts in a hurricane, swimming through a surf with a line . . . always an example of devotion to duty, and as unflinching as a hero in a book. (LJ 5)

コンラッドの海は通俗的海洋冒険小説と重なるヒロイズムの虚構をはぐくむ場となっているのである。⁽⁷⁾

しかしパトナ号 (the *Patna*) 事件の後、ジムの存在はこの虚構と対立するようになる。彼は沈んでゆくパトナ号とその乗客の巡礼者たちを見捨てた罪により船員資格を剥奪される。彼が海から追放されたのは、彼が船員の社会を秩序だてる規範を破ったからである。ジムの行為は船員にに対する乗客の信頼を揺るがし、船乗りの共同体の団結を危機にさらす。ここで問題となってくる規範とは単なる法的制約のことではなく、むしろ倫理的なものであることは明らかである。パトナ号を見捨てたのはジムだけではない。パトナ号の他の航海士も同じ行動をとっており、しかも裁判を受けることを恐れ雲隠れしてしまっている。ジムを裁いたブライアリー (Brierly) 船長があれほどその尊厳の犯されるのを恐れていた船乗りの共同体はすでにこうした醜さを見せているのである。したがってジムの存在が脅威となるのは、船員という職業の倫理的に美化された理想に対してである。ジムが公に裁かれることにより、海上に幸うじて成立している信頼とヒロイズムの虚構の空虚さが白日の下にさらされてしまうのである。

ジムは船員資格を剥脱されることにより、理想的ヒロイズムが浮遊する虚構の空間として海から追放された。その後、彼は海への復帰という叶わぬ願いを抱き放浪することになるのだが、彼を追放したのはまさにコンラッド的海の

ヒロイズムの裏側に潜む虚空と混沌であるといえる。『偶然』や『影の線』では抑圧されていたが、海と海上生活の理想的虚構には意味の混沌と理解の不可能性を引き起こす否定の意志が付きまとう。これが『ロード・ジム』では一気に吹き出してジムを襲う。パトナ号の航海中の破損の原因は解明することはできなかった。いわば彼は海が持つ、人間には理解不可能な敵意によって破滅したのである。

ジムは海の英雄になることを夢見た。言い換えれば海と自分との間にある種の信頼関係が成り立つと考えたのである。だが海とは非人間的な自然であり、人間の倫理的判断を越えた理解不可能な力が支配する場所だった。『海の鏡』における海に関する記述を見てみよう。海で働く力の性質の典型は西風である。

The manner in which the great West Wind chooses at times to administer his possessions does not commend itself to a person of peaceful and law-abiding disposition, inclined to draw distinctions between right and wrong in the face of natural forces, whose standard, naturally, is that of might alone. (MS 89)

西風は善と悪との区別を知らない暴君である。また、海は不誠実でもある。『海の鏡』の語り手が真の船員となったのはこの海の不誠実に気付いた瞬間であった。

On that exquisite day of gentle breathing peace and veiled sunshine perished my romantic love to what men's imagination had proclaimed the most august aspect of Nature... I saw the duplicity of the sea's most tender mood. It was so because it could not help itself. . . . Its illusions were gone, but its fascination remained. I had become a seaman at last. (MS 141-42)

自然が人間を何のてらいもなく裏切るという認識は重要である。この認識がジ

ムには欠けていた。「穏やかな風の吹く平穏でベールを掛けたような日差し、このうえなく素晴らしい日」に「自然の威厳ある側面にロマンティックな愛情」を感じるといえるのは、海洋冒険小説を読み、その主人公になることを夢見るジムの描写である。

引用されたどちらの部分も船員の生活や過去を美化する穏やかな調子に包まれているが、そこに見られる自然の非人間性の認識は、悲観的な懐疑主義と密接に関連している点において深刻である。世界の本質が善悪の区別の欠如と二重性であるとすれば、全ての人間的倫理観は意味を失う。倫理体系の根本にあるべき二項対立が成立しないのだから、善も悪も定まるはずがない。したがってすべてのものは善でもあるし、悪でもあるという二重性、非決定性の論理へ向かう以外の道は閉ざされてしまう。そしてこの混沌は容易に敷衍されて論述一般の非決定性にまで広がってゆく。善悪の倫理性を取り除けば、コンラッドの海の暴君性の中には関係性を支えるあらゆる二項対立の不可能性の認識が見えてくる。むしろ二項対立こそがそもそも何らかの価値の前提なくしては存在しないのだから、善と悪の区別の欠如こそがあらゆる論理性、理解の可能性を否定を引き起こすといえる。コンラッドの小説では対立しあう概念が何重にも打ち消しあって、非決定性の空虚さを生み出すというパターンが顕著である。

『西欧の目の下で』(*Under Western Eyes*)での、独裁主義と革命主義の相反する主張に関しての考察の展開のされ方を例として考えれば良いであろう。⁽⁸⁾ 意味の非決定性の混沌と空虚さがコンラッドの作品の唯一の絶対的論理といえる。この点で引用に現れたコンラッドの海の性質が、彼の作品全般に見られる懐疑主義と繋がっていることは明らかである。

世紀が終わりに近づく連れて、万物の中に倫理を見だし得たヴィクトリア朝時代の信念は弱まり、懐疑主義的傾向が強まってゆく。コンラッドは独断主義と絶望、独裁と無政府主義の間で葛藤しながら絶対的安定を夢見つつ、かなえられずに懐疑主義へと向かう。⁽⁹⁾ ジムの挫折も倫理的意図の絶対性、純粹さをひたすら追い求めるが果たされないことに起因するといえる。『ナーシサス号の黒人』の中に見られた団結のテーマにもかかわらず、個人と個人をつなぐ関係は崩れ、孤立が顕著になっていく様相こそがコンラッドの作品を流れる主

旋律であろう。マーロウは次のように語っている。

It is when we try to grapple with another men's intimate need that we perceive how incomprehensible, wavering, and misty are the beings that share with us the sight of the stars and the warmth of the sun. It is as if loneliness were a hard and absolute condition of existence. (*LJ* 109)

レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) は『ノストローモ』 (*Nostramo*) の中の主人公とデクー (Decoud) の関係の描写 “Nothing in common between them,” “no bond of conviction of common idea” にふれ次のように述べている。

“[T]his is new experience, the new social experience, which complicates and surpasses simple and customary virtues. . . . What has happened is the disappearance of a social value.”⁽¹⁰⁾ 社会的価値観の喪失がコンラッドの海の否定の虚空に繋がっているのである。

ジムという登場人物の軌跡はまさにこうしたコンラッド的海の構造を反映している。一方で彼は理想的ヒロイズムの場としての海を一途に追い求める。だがもう一方では、小説の構造の中で彼は懐疑主義の空虚さ、解釈の混沌、理解の不可能性を示唆する役目を負わされてる。このことは彼が理解不可能な力によって破滅へと導かれる一方で、ジム自身も理解不可能な存在という位置を小説中に占めるという形で現れる。この点においてマーロウの次の言葉は小説の構造を要約している。

He [Jim] was overwhelmed by the inexplicable; he was overwhelmed by his own personality — the gift of that destiny which he had done his best to master. (*LJ* 207)

ジムもマーロウも共に船乗りのヒロイズムという虚構を必要とした。ただマーロウは海に潜む空虚さに気付いていた。いかえれば、言説の存在を含むすべての概念が善悪の混沌を故意に見落とすことによって成立する虚構だとい

う懷疑を持っていた。⁽¹¹⁾ 一方ジムは海の二重性に気付かない。そのため彼は言説による理解の成立しない状況の中で苦しみ、善と悪の区別のつかない混沌の中でもがくのである。上に引用したように、マーロウが人間同士の真の理解を諦めているのに対して、ジムはマーロウに自分自身を理解してもらうことを切望する。“I would like to explain—I would like somebody to understand—somebody—one person at least! You! Why not you?” (LJ 50). そして、ジムがマーロウに理解して欲しかったのは、彼がパトナ号を見捨てたのは他の航海士とは異なる動機においてであったということである。“He [Jim] wanted me [Marlow] to know he had kept his distance; that there was nothing in common between him and these men.” (LJ 63-64). ジムは自分がパトナ号で取ってしまった行動の中にあつたヒロイズムをパトナ号の航海士たちのあさましいエゴイズムと区別しようとする。ジムにとって海は、本来なら陸の耐え難い人間の複雑さ、矮小さ、俗悪さから隔離された場であり、素朴でロマンチックな価値体系の具現化されるべき場であつた。この点、最後にジムがたどり着くパトゥサン (Patusan) も同じである。そこでジムは善と悪の区別をいっそうはっきりと確立し、自分を善の側におけるはずであつた。だがコンラッドの海が善悪の区別を否定する懷疑を秘めているがゆえにジムの善なる起源も回復されることはない。

ジムは理解されることを求めて放浪するが、皮肉なことに一方で小説の中の彼の存在は最終的理解の不可能性の記号となっている。『ロード・ジム』という小説自体、ジムの様々な解釈で成り立つ不連続な構造を持つといえる。⁽¹²⁾ マーロウを初めとし、この小説の多くの登場人物は彼ら自身の、互いに対立するジムの解釈を展開する。それらの異なる解釈の上にマーロウの語り位置するが、彼の解釈にしても他の局所的解釈を統一して最終的意味をジムに与えることはできない。マーロウにとってもジムは深い霧の向こうにかいま見る断片的な姿でしかない。

I don't pretend I understood him. The views he let me have of himself were like those glimpses through the shifting rents in a thick fog – bits

of vivid and vanishing detail, giving no connected idea of the general aspect of a country. They fed one's curiosity without satisfying it; they were no good for purposes of orientation. (LJ 47) ⁽¹³⁾

ジムは小説を通じて解釈の対象物の位置におかれるが、小説中のどの解釈者も結局彼を理解することはできない。一連のジムの解釈の試みから浮かび上がって来るのは、理解不可能な存在としてのジムである。マーロウはジムについて次のようにも語っている。

It seemed to me I was being made to comprehend the Inconceivable. . . . I was made to look at the convention that lurks in all truth and on the essential sincerity of falsehood. He appealed to all sides at once. (LJ57)

ジムのヒロイズムへのこだわりは、海の虚構をささえる基本的な善悪の二項対立とそれに基づく相互理解の絶対性とを求めることであったはずである。しかし、マーロウによれば、彼自身が「想像も及ばない」(Inconceivable)、真実と偽りの両面が入り交じった存在になってしまっている。彼の倫理的絶対性の回復の試みは、解釈行為の果てしない相対性を暗示しながら挫折する。

パトナ号から始まったジムの放浪はパトゥサンでそれまでの悲観的暗示を決定づけて終わる。善悪の混沌の中で確固たる地位を与えられるのはジムの理想的ヒロイズムではなく、ブラウン(Brown)の破滅的悪である。パトナ号の航海士たちの悪が人間の矮小さを表していたのに対し、ブラウンが体現する悪は人間性の本質を揺るがす巨大な普遍性を秘めている。すでにパトナ号での事件とそれに続くジムの挫折で、彼のヒロイズムが非現実的理想主義であることは暗示されていた。加えてブラウンがもたらしたジムの最終的な挫折が暗示するのは、人間の本質的・非人間性であり、人間の欲望を抑制するあらゆる文化的価値の根柢の崩壊である。この点においてブラウンはむしろ密林のカーツに近い。ジムとブラウンが対峙するとき、ブラウンが明確に自己を規定できるのに対し、ジムは自らの存在の根柢を失う。

“‘Who are you?’ asked Jim at last, . . . ‘What made you come here?’ ‘You want to know,’ said Brown bitterly. ‘It’s easy to tell. Hunger. And what made you?’

“‘The fellow started at this,’ said Brown, relating to me [Marlow] the opening of this strange conversation between those two men, separated only by the muddy bed of a creek, but standing on the opposite poles of that conception of life which includes all mankind. (LJ 231-32)

またブラウンの手段を選ばぬやり方は海の支配的力のひとつ東風を思い出させる。“In his forays into the North Atlantic the East Wind behaves like a subtle and cruel adventurer without a notion of honour or fair play” (MS 94). ブラウンの存在はこの小説の中にある既存の社会的価値体系に対する懐疑を決定的なものとする。マーロウやスタイン(Stein)の分別、悟り、あるいはパトゥサンの人々の素朴な善良さといった人間を価値ある存在たらしめようという特徴は文明的であるのに対して、ブラウンの飢餓、悪は、文明を越えた原初的な人間性とのつながりを持つものとして描かれる。孤独な絶対悪を表すブラウンを前に、ジムの理想的美徳は容易に反転して孤独な罪悪感に変わってしまうのである。⁽¹⁴⁾

ブラウンによって明らかにされた絶対悪と共に、パトゥサンにおいてももうひとつの重要な放浪のモチーフが浮かび上がって来る。家族の暖かい関係の構築を目指す再生への願望である。ジムは社会の規範を破ったために追放された。このことをジムは父とはもう二度と会えないという形で痛切に意識する。ジムの死のことを名前の言及されない相手に手紙で語る際、マーロウはジムの所持していた手紙を一緒に送っている。

It is from his [Jim’s] father, and by the date you can see he must have received it a few days before he joined the *Patna*. Thus it must be the last letter he ever had from home. He had treasured it all these years.

The good old parson fancied his sailor son. I've looked in at a sentence here and there. There is nothing in it except just affection. . . . Virtue is one all over the world, and there is only one faith, one conceivable conduct of life, one manner of dying. (LJ 207)

ジムが憧れたヒロイズムの虚構は、善が世界を覆っている場であったろうし、倫理的相対性の中、放浪するジムが求めたのは唯一絶対の善であったはずである。こうしてみるとジムの父親こそ、ジムが放浪しながらも得ることを求め続けた絶対性と重なって来る。だがパトナ号において決定的罪を犯したジムは、自分が父親のもとに帰れないのは十分承知していた。それに上に引用した手紙の中で彼の父親は次のようなことを願っているのである。“‘[D]ear James’ will never forget that ‘who once gives way to temptation, in the very instant hazards his total depravity and everlasting ruin’” (LJ 207-08). したがって父親と、彼によって体現されている絶対性の確信を求めながら、ジムは祖国ではなくパトゥサンにその代替物を見付け出そうとするのである。この屈折した象徴的親子関係もコンラッド的である。幼いころのコンラッドは決して両親からの愛情に恵まれていたとはいえない。むしろ後の心理的不安定さの原因を両親の早い死に代表される幼児期の不幸の連続に求める方が自然である。両親との暖かい関係が不足していた彼は、真に密接な親子関係を切望したようだ。その現れの一つとして別の親からの再生、生まれ変わりへの願望が彼の小説の中に伺われるのはマイアが指摘しているとおりである。⁽¹⁵⁾ 『ロード・ジム』と類似点が指摘される『オールマイア』と『追放者』のオールマイアとウイレムズ (Willems) の二人の主人公にもそれが当てはまる。この別の出自へのあこがれも結局は自分の本当の両親との和解、家族の絆の回復にあることはコンラッドの場合にも、また『ロード・ジム』においても明らかである。

ジムは船の上では達成できなかった英雄願望をまったく別の場で代替的に達成しようとしてパトゥサンへ向かう。そこで彼は英雄的行為でもってパトゥサンの住民に崇められるようになると同時に、ジュエルと結ばれ家族の絆を得る。だがこの家族の絆こそが彼を最終的破滅へと追いやることになる。彼の破滅は、

父親と息子の中で善悪が入り交じってしまった時に起こる。ジムがパトゥサンで得た父親とはコーネリウス (Cornelius) であった。彼は、ブラウンにデイン・ウォリス (Dain Waris) を殺す手段を与えた点で物理的にジムの破滅の原因となったが、彼がジムの義父である点で象徴的にもジムの追い求めた理想の破滅を意味していた。パトゥサンにジムが求めたもうひとつのものは、故郷に代わるもの、すなわち父親の代替物であった。だが結局彼が手に入れたのは人間の中の劣悪な品性を具体化したコーネリウスである。つまりジムの父親がジムの本来帰属すべき社会の規範とその徳を楽観的な形で表していたとすれば、コーネリウスはその裏に潜む偽善性、卑しさを悲観的な強調でもって表している。ジムが英雄となったその陰で、彼の理想が彼を裏切って、コーネリウスと一体となってしまっていたことをコーネリウスがジムに対して占める義父という位置が物語っている。

このことは実は小説の冒頭から明らかであった。ジムの父親は次のように描写されていたのである。

Jim's father possessed such certain knowledge of the Unknowable as made for the righteousness of people in cottages without disturbing the ease of mind of those whom an unerring Providence enables to live in mansions.
(LJ4)

小説は、ジムの父親の楽観的な絶対善への信頼に疑いを投げかけている。ジムも彼の父親も現状肯定を前提とした調和の虚構の中にいるといえる。その虚構の裏側にあるのは、ジムの父親の存在が暗示する階級差別に基づく実用主義である。またジムの願望とパトゥサンでの行動が暗示するように帝国主義的植民地支配の論理でもある。⁽¹⁶⁾ このように異質な2つの文化の出会いという形式を演出しつつ、パトゥサンはその実ジムのよるべき西欧社会の内部に潜む空虚さを暴き出している。このヨーロッパから異文化への拡大に伴う中心の空洞化、密林と都市の関係の反転こそ『闇の奥』の主題でもあった。

人間は、慣習と個の循環運動の中でテキストに生成される。未来はいつも何

らかの形で書物の中に既に書かれている。ジムは海上での帝国主義ロマンスに自分の未来を見た。しかし海はテキストの論理を根本から破壊するような非論理性で持って彼を追放した。ジムがパトゥサンにいつまで成そうとしたのは自分自身の現在と過去と和解させることでもあった。ジムの現在と過去の溝を修復するには未来しかないであろう。だがジムは結局小説を覆う懐疑の非決定性の中で先へ進むことはできなかった。彼の未来は懐疑の中に失われた。ジムは死を選ぶが、そこには死によって明確な救済、贖罪がなされた証しはない。到達点の空虚さが意識されている点において、まさにジムの旅は放浪である。そしてこの放浪の構図はコンラッドの作品の構造の深部に根付く否定の懐疑を反映したものである。カーモード (Frank Kermode) の論によれば、エリオットにいたる今世紀初頭のモダニストたちは伝統の中に将来のヴィジョンの源泉を求めたことになる。彼らは総じて堅固な未来観を作り出し、移行の狭間にあると感じられる自分達を救おうとした。それはまさしく現在と過去を和解させることであった。彼らの中に見られる神話への傾倒は現実を排除した救済の虚構作りの一例である。⁽¹⁷⁾ 一方コンラッドは郷愁と美化を感じさせるやり方でしばしば過去を振り返るが、彼の作品には虚構として独り立ちするほどの強力で独断的なヴィジョンは見られない。⁽¹⁸⁾ 彼の作品の海の中に浮かび上がってくる二重性と非決定性は、虚構それ自体をも懐疑の中においている。また価値を構成する基本的な対立関係さえも成立しないため、彼の小説の中では概念同士が打ち消し合ってしまうと同時に人類全体の問題に一般化されていってしまう。⁽¹⁹⁾ リアリズム的に同時代の人間と社会を描写し、その問題点を浮かび上がらせても、それへの回答を構築するために必要な個別性は、象徴的で決定し得ない善悪の争いの中に失われてゆく。このようにコンラッドは現在と過去をないまぜにして神話化しうるヴィジョンを持っていないという点で、モダニズムの少し前にいる。文学史的比喩においても放浪は彼の作品の特徴となっている。

注

(1) Linda R. Anderson, *Bennett, Wells and Conrad : Narrative in Transition* (London : Mac-

- millan, 1988) 3-38参照。
- (2) Joseph Conrad, *The Mirror of the Sea and A Personal Record*, ed. Zdzisław Najder, *The World's Classics* (Oxford: Oxford UP, 1988) 155-83. 以後MSと略記し、引用の際は本文中に頁数を記す。
- (3) Bernard C. Meyer, *Joseph Conrad : A Psychoanalytic Biography* (Princeton: Princeton UP, 1970) 21-34参照。
- (4) テキストはJoseph Conrad, *Lord Jim: A Tale*, ed. Thomas C. Moser (New York: Norton, 1968) を使用し、引用の際はLJと略記し頁数を記す。
- (5) Joseph Conrad, *Chance: A Tale in Two Parts*, ed. Martin Ray, *The World's Classics* (Oxford : Oxford UP, 1988) 270-71.
- (6) Joseph Conrad, *The Shadow-Line : A Confession*, ed. Jacques Berthoud (Harmondsworth: Penguin, 1986) 82-83.
- (7) 『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the "Narcissus"*) においては、船員と陸上の人々のどちらが排除されているのかについての曖昧さが見られる。しかしこの問題は抑圧されたまま小説は終わる。Joseph Conrad, *The Nigger of the "Narcissus."* ed. Robert Kimbrough (New York : Norton, 1979) 104-05参照。
- (8) Terry Eagleton, *Exiles and Émigré: Studies in Modern Literature* (London: Chatto & Windus, 1970) 22-24参照。
- (9) Mark A. Wallaeger, *Joseph Conrad and the Fictions of Skepticism* (Stanford: Stanford UP, 1990) 7-16参照。
- (10) Raymond Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London: Hogarth, 1984) 150.
- (11) 言語に対するコンラッドの懐疑については、Edward W. Said, *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge: Harvard UP, 1983) 90-110参照。
- (12) Benita Parry, *Conrad and Imperialism: Ideological Boundaries and Visionary Frontiers* (London: Macmillan, 1983) 77, 82; J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Oxford: Basil Blackwell, 1982) 22-42参照。
- (13) Parry 84参照。
- (14) ブラウンの小説中で持ち得る意味が普遍的なものであるか、そうでないかが批評家

の間で議論されて来た。例えば次の論文を参照。Ralph W. Rader, "Lord Jim and the Formal Development of the English Novel." *Reading Narrative: Form, Ethics, Ideology*, ed. James Phelan (Columbus: Ohio State UP, 1989) またHawthornは『ナーシサス号』のドンキン (Donkin) とウェイト (Wait) について、前者を現実的レヴェルでの悪、後者を象徴的悪と区別して論を展開している。Jeremy Hawthorn, *Joseph Conrad: Narrative Technique and Ideological Commitment* (London: Edward Arnold, 1990) 120. 『ロード・ジム』ではドンキンの表した現実的悪はすでに船員の世界に根付き、ウェイトの普遍的悪は人間の根源に位置を占めているといえる。

- (15) Meyer 347.
- (16) Parry 1-20参照。ジムが帝国主義のために働く階層から造形された登場人物であり、通俗的植民地物語との間にインターテクスチュアルな関係があることもバリーによって指摘されている (Parry 79)。
- (17) Frank Kermode, *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction* (Oxford: Oxford UP, 1966) 93-124.
- (18) Parry 97参照。
- (19) Williams 133参照。